

[印象記]

第19回新潟医療福祉学会学術集会印象記

新潟医療福祉大学 健康科学部 健康スポーツ学科
教授 西原 康行



去る10月26日土曜日、新潟医療福祉大学において当大学リハビリテーション学部義肢装具自立支援学科の東江由起夫大会長のもと、同学科の先生方が実行委員会を組織して学術集会が開催されました。今年度の学術集会のテーマは、「アスリートを支援する

先進的保健・医療・福祉・スポーツネットワーク」であり、2020年東京五輪・パラリンピックを1年後に控え、新潟医療福祉大学を中心とした保健・医療・福祉・スポーツの連携をさらに加速させて、スポーツアスリートの支援に留まらない、新たな時代のスポーツのあり方について様々な視点からのテーゼが成されました。

特別講演では、公益財団法人障がい者スポーツ協会の中森邦男氏がパラリンピックの歴史を紐解きながら、その発展過程と価値について体系的に、わかりやすく、また参加していた学生に問いかけながら話されており、参加者全員が共通理解を深めることができたと感じています。その中で特に私が感じたこととして、パラリンピックは障がいのレベルの違いによるカテゴリー分類が難しいことから、勝敗の未確定性を保証すべきスポーツとして今後どのように発展させていけばよいのかといった乗り越えるべき課題が生じるということです。しかしながら、一方でこの課題を含みながら文化としてきちんと次世代に継承していくことに障がい者スポーツの魅力があるということを私なりに理解することができました。

一般発表は、口頭発表が6件、ポスター発表が89件であり、内容が非常に多岐にわたっており、本学会が良い意味で保健・医療・福祉・スポーツの学際的な領域であることを改めて認識しました。特にポスター発表が行われた第9研究・実習棟（S棟）2階S201（通称：MOMO café）では、会場内を歩き来しやすい空間環境に設定され、コーヒーやお菓子が自由にふるまわれていたことか

ら、若手の参加者がコーヒー片手にインターディシプリナリーな議論を活発かつ和やかに展開していました。これからの日本の科学技術のベクトルが学際性にあることから本学会の発展の可能性を実感することができました。

シンポジウムでは「QOLを向上させる最先端スポーツ活動」というテーマで東江由起夫氏（新潟医療福祉大学義肢装具自立支援学科教授）、佐近慎平氏（同大学健康スポーツ学科准教授）、江玉睦明氏（同大学理学療法学科教授）の3名から実践事例が報告されました。東江氏からは、義肢装具自立支援学科におけるパラアスリート支援ネットワークの構築と教育、佐近氏からは、行政と一体となったパラリンピック教育、江玉氏からは、多職種間連携によるアスリートサポート体制について報告され、いずれも他の大学にはない新潟医療福祉大学のオリジナリティであり、今後はさらにそれぞれの活動を連携して機能させることが2020年東京五輪・パラリンピック終了後の大きなレガシーに結びつき、スポーツという文化の発展に寄与することが提言されています。

最後に、この学術集会を盛況かつ成功裏に導いた東江由起夫大会長、勝平純司実行委員長、実行委員である新潟医療福祉大学義肢装具自立支援学科の教員の皆さんに敬意を表するとともに、来年度開催される第20回新潟医療福祉学会学術集会がさらに発展することを期待して印象記とさせていただきます。

